

# 樋口一葉『わかれ道』について

## —『にぎりえ』における蓮實の知見から

堀内 みき

### 1 はじめに

蓮實重彦の論考「恩寵の時間と歴史の時間 樋口一葉の『にぎりえ』」<sup>(一)</sup>は、ふいに「新開」を訪れ、酌婦のお力に「来歴を語れ」とたたみかける男、結城朝之助が物語に果たす役割を焦点化することによって、一葉の『にぎりえ』を鋭く分析してみせた。

蓮實は『にぎりえ』の主たる場、「新開」にまず着目する。ここでいう「新開」とは、「明治以前の時が流れてはいないという暗黙の前提が共有されている」がゆえに、自らの過去を振り返らぬまま生きることができうる場であり、旧体制と新体制の変節点である「維新というもの」が、その「新開」という場を作り出すことを可能にしている。生来の美貌と気質によって客を思うままにあしらうお力がそこで過ぐす時間を、蓮實は「新開の時間」と呼んだ。そして、彼女が振り返らずにいる（その限りにおいては、「歴史の時間」が「新開

の時間」に滲出することなく、それによって生じる葛藤に直面せず）に済むため、その時間はお力にとつて「恩寵の時間」となりうる（過去（「歴史の時間」）を強引に「告白」せしめることによって、お力が享受している「恩寵の時間」の流れを容赦無く裁ち切り、再び苛烈な「歴史の時間」へと引きずり戻す役割を果たす者、結城を「メフィストフェレス」と呼んだ）。

このように、蓮實は「新開の時間と伝統あるいは歴史の時間」というものの交錯を、何とか一つの言葉にしたいという野心の表明<sup>(二)</sup>こそが日本近代文学の仕事であり、樋口一葉から中上健次に至るまで、日本文学はこの「暗黙の主題」に取り組んできたのだと喝破した。

この論考において際立っているのは、二つの時間を交錯させる端緒となる働きをする者に、「メフィストフェレス」という名を与えたことである。悪意を持って主人公を唆し、墮落へと誘惑する『ファウスト』の「メフィストフェレス」<sup>(三)</sup>のように、結城はお力に「救

いではなく、徹底的な危機としての「告白」をそのかすことによって、布団屋の源七による物理的な殺害を待つことなく、抽象的なレベルにおいて彼女を殺す。

筆者は、蓮實の指摘する「歴史の時間」と「恩寵（新開）の時間」という質の異なる二つの時間が、『にぎりえ』と同じく一葉の手になる『わかれ道』についても持たれており、さらに、その二つの時間の交錯の端緒となるメフィストフェレス」による「告白」が、吉三とお京という二人の登場人物の会話の中に見られるのではないかと考えた。そこで、本稿では蓮實の論考を『わかれ道』に援用し、読解を行ってみたい。

## 2 『わかれ道』について

一八九六（明治二九）年一月四日、樋口一葉は雑誌『国民之友』に『わかれ道』<sup>(六)</sup>を発表した。一葉の代表作である『たけくらべ』や『にぎりえ』、『十三夜』に続いて発表され、こののちに『この子』『われから』といった作品が編まれた。「上・中・下」の三部からなる『わかれ道』は、傘張り職人の吉三、仕事師（縫物師）のお京という二人の人物を軸として、お京が住まう傘屋の裏の長屋を中心に展開される。「上」では二人の日常的な生活が、「中」では吉三の生い立ちとお京が長屋に現れた際の出来事が、「下」では二人の「わかれ」が描かれ、物語が閉じられる。

蓮實の『にぎりえ』と同様、『わかれ道』も「維新というもの」を

経て激甚に変化した土地を舞台としており、「新開（恩寵）の時間」と「歴史の時間」がそこにあるのだと考える。また会話がふんだんに盛り込まれた『わかれ道』にあつては、「恩寵の時間」を破壊する告白がそこできなされ、お京と吉三、そのいずれかが「メフィストフェレス」としての機能を果たしていると仮定することができるのではないだろうか。

「歴史の時間」に引き戻されたのはたして誰であつたのか。そしてそれは、お京と吉三、二人の「わかれ」にいかに関与するのか。その議論にあたつて、まずは『わかれ道』の舞台となつた「傘屋の裏の長屋」が、江戸から明治、そして維新という時代の変節点の中で、どのような空間であつたのかを確認しておきたい。

## 3 物語の舞台

『わかれ道』「中」は、吉三の来歴語りから始まる。

今は亡せたる傘屋の先代に、太つ腹のお松とて一代に身上をあげたる、女相撲のやうな老婆さまありき。六年前の冬の事、寺参りの帰りに角兵衛の子供を拾ふて来て、「いゝよ、親方から八釜しく言つて来たらその時の事。可愛想に、『足が痛くて歩かれないと言ふと、朋輩の意地悪が置ざりに捨てゝ行つた』と言ふ。そんな処へ帰るに当るものか、少とも怕かない事はないから私が家にゐなさい。（略）お前、新網へ帰るが嫌やなら、此家

を死場と極めて勉強をしなければならないよ。しつかりやつておくれ」と言ひ含められて、「吉やく」とそれよりの丹精、今油ひきに、大人三人前を一手に引うけて、鼻歌交りやつて除ける腕を見るもの、流石に目鏡と亡き老婆を褒めける。(一三七―一三八項)

吉三が拾われた「新網」は増上寺山門との結び付きが強く、江戸以来の貧民窟として知られた<sup>(七)</sup>。ルポルタージュの題材としても着目され、『最暗黒の東京』<sup>(八)</sup>には、東京第一とされた貧民窟「新網」の様子が詳しくまとめられている。

#### 新網町

東街道よりすれば旧江戸の入口にして芝浦の海浜に近く、四谷、下谷の両貧窟と相対して正三角最後の起点となる処に一区域あり。また窮民の棲居にして廃屋の集まるもの五百余、陋穢不浄の甚だしきに至つては、けだし都下六貧窟中その第一に位するもの、たまたまその貧状を目撃してその形容を作るの人は、彼ら自らを認識して、茲に日本一貧乏者の麁園なりと。

やや時代がくだるが、一九二二(大正十一)年一月一日発行の協同会の機関紙『社会政策時報』第五号に掲載された深海豊二の「東京市内各區の細民窟」調査(承前)<sup>(九)</sup>には、「新網」の風俗が次のように語られている。

#### 風紀の状態

芝区に多いのは男女の私通で、時には人妻との不義から刃物三昧の騒ぎが演出される事もある。従つて私生児が多い。又男女共に早熟である。

さらに『明治東京下層社会』「東京の貧民の状況」<sup>(一〇)</sup>には、貧民窟の人々がどのように暮らしを立てていたのかが記されている。

さて、右貧民の人々は何をして活計<sup>たつき</sup>となすやおおよそ左の如く類別すると得べし。

野ぶせり(乞食) 袖乞(不具廃疾) 請願時参り 六十六部  
西国巡礼 瞽女 盲人の手曳き すわり(橋畔または路傍にて  
三味線を曳く者) 紙屑拾い 紙屑撰り 魚の腸拾い 古下駄  
拾い 下駄齒入れ 硝子毀れ<sup>こわ</sup>買い 猿廻し 新内語り 阿房  
陀羅經 角兵衛獅子 あひる(泥溝中にて埋没品を拾うもの)  
羅竿<sup>らかん</sup>仕替え 草むしり かる子 土方 荷車後押し 土車挽き  
(あるいは石炭) 立ん坊 井戸屋網曳き 下等車夫

このほかなお種々なるべきも就中紙屑拾い、下駄直し、下等紙屑拾い、硝子毀れ買い、下等人力車挽き等を営むもの最も多く、その生活の実況に至つてはまた千差万別なるべし。

車夫や網曳きといった肉体を酷使する日銭仕事をはじめとして、現

在で言う廃品回収や物乞いといったものが「活計たつきの手段」として縷々並べられている。こうした状況を鑑みると、「生れると直さま橋の袂の貸赤子に出されたのだな」と朋輩の奴等が悪口を言ふ（上）という一節は、吉三の過去として全くあり得ない「悪口」ではなかったことが窺える。ついで右に挙げられ、かつて吉三が活計たつきとしていた角兵衛獅子について、高橋裕一の「角兵衛獅子の歴史と概要」（二）を参照すると、「角兵衛獅子」は越後国西蒲原群月潟村（現在の新潟県新潟市江南区月潟）に由来を持つ演芸であり、江戸や大阪、京都を初め、各地を旅し芸を披露する越後の人々の出稼ぎ手段の一つであったとされている。児童を主たる演者として口上を行い、太鼓を打つ親方一人、笛一人、獅子頭を頂上に抱く四―五歳から一二、三歳頃までの子供三、四人が一組となって演じられた。この「角兵衛獅子」は、幕末には七〇余組にも及んだという。本来、角兵衛獅子は全国を巡業する興行であったが、組数が増加する幕末頃には江戸に定住するようになる。また、「近世大道芸人資料―角兵衛獅子考（二）」<sup>（八）</sup>によれば、角兵衛獅子の子どもは「初期は身内の子であったものが、専門化したことによつて、他人の子を使い、さらに末期には、部落外に求め、旅先で私生児や衰弱している家の子を貰い上げるようになった」とされる。

新網の風紀の状態、さらに幕末期には「角兵衛獅子」がすでに定住化し活動を行っていたことを鑑みると、吉三はなんらかの形で越後にルーツを持っており、そこから親族をたどることのできる子供であると仮定するよりは、貧民窟の私生児として生まれ、そこか

ら「角兵衛獅子」の子として使われていたと考えることが自然である。

この角兵衛獅子が幕末から近代にかけ、東京という都市空間の中でどのような変容を遂げたのか、それは池内恵那の「変容する角兵衛獅子―近代の都市空間―東京の中で―」（二）に詳しい。池内は角兵衛獅子が近代のまなざしにさらされた最初の例として、一八七一年（明治四）年五月一六日の英字新聞『THE FAR EAST』「SHISHI, JUVENILE STREET TUMBLERS.」（路上の少年軽業師、獅子）における記述を引き、その記事がロンドンの孤児と角兵衛獅子の子供たちを重ね合わせて書かれていることに触れ、当時の日本において、「角兵衛獅子」の子供たちが、福祉の観点から当然保護されるべき国民国家の成員として包摂されていないために海外から批判されていたことを指摘した。さらにこうした状況を打破していくために、その突破口を、国民が「人心風俗」を教育により更新していくことに求めたのだとし、そうした風潮と明治五年の学制発布とを関連づけている。

一葉が『わかれ道』を著した明治二〇年代後半は、子供を保護すべき対象とし、さらに国民国家の成員とするべく教育を施すというように、西洋の価値観が日本に影響を及ぼし始め、下層社会や貧民窟というものがにわかに世間の耳目を集めた時期でもあった。浅野正道<sup>（三）</sup>は、明治二十年代の貧民窟にポスト自由民権運動の動向の中心となるような、民友社・政教社系のメディアの熱心な支持者を魅了するような多くの要素、すなわち「従来、適切に表象し代表さ

れてこなかった〈貧しく沈黙した大多数の人々〉を問題化しうる〈全国民的〉なトポスを創出しようとする野心、そしてその場合において成型される〈国民〉という〈主体性〉への関心等々（二〇一項）」があつたであろうことを指摘し、こうした「貧民窟」の人々を描写することが、政府や特定の政党によらぬ「国民意識」の形成に寄与した可能性を指摘している。また、そうしたメディアの代表として、浅野は『国民之友』をあげる。

（…）たとえば、『国民之友』は創刊にあたって、政府から独立し、特定の政党の利害に偏らず、また階級をも越えた、「全体の国民」の立場に立つことを高らかに宣言していた、「嗟呼国民之友生れたり」明治二〇年二月一五日。（二〇一項）

『国民之友』は一葉が『わかれ道』を発表した媒体である。一葉が、当時の政治運動や国民国家意識を醸成していくための世論の形成にどれほど意識的であつたかという問題はまた別に議論せねばならないところであるが、作者がそれを意識しようとしまいと、『国民之友』の読者に向けて、貧民窟育ちの芸人、それも孤児同然の吉三と、没落した旧支配階級の女、お京（お京の「歴史の時間」については後述する）という、明治以前には決して同じ場に集うことなど考えられなかった二人が火鉢を囲む物語を編んだことは、興味深く受けとめられたことであろう。

その新網の角兵衛獅子の子供であつた吉三を保護した（拾った）

のが、「今は亡<sup>う</sup>せたる傘屋の先代」、「太つ腹のお松」である。お松が吉三を拾った新網に隣接する青山地区は、江戸期から和傘の生産で知られた。『港区史下巻』第八章近代産業経済 明治初年の生産品<sup>（二四）</sup>には「和傘と言えは青山、青山と言えは和傘の観があつた」とあり、幕府瓦解後も和傘の製造は継承され、赤坂・麻布芝の一部にもこの産業が活発に行われたのだという。この界限で最も高い生産高を誇つたのが年産一三〇〇〇本を数えた麻布筭町であり、桜田町・六本木町・宮下町・新網町・永坂町・飯倉四・五丁目などの製造地の三千本程度の生産高と比しても、突出した数字であつたことが記述されている。

ここから『わかれ道』の舞台を判断するならば、最も高い生産高を誇つた麻布筭町界限であると考えられないだろうか。生産高以外の観点、例えば地理的な面からも、この判断は妥当であると思われる。例えば「下」の「坂上の得意場」から傘屋へ帰っていく描写から、お松の傘屋は高低差（坂）がある場所に位置していると考えられ、一九〇七（明治四〇）年当時の地図を現代の地図上に重ねあわせた『古地図ライブラリー 別冊 古地図・現代図で歩く 明治大正東京散歩』<sup>（二五）</sup>を参照すると、麻布筭町周辺には「大横丁坂」、「狐坂」、「狸坂」、「仙台坂」、「暗闇坂」といった坂が多くあり、また坂上には旧乃木邸や内大臣邸など高官の住宅も擁している。

ただ、和傘の生産といった江戸以来の手工業も、日清・日露戦争が促した工業の近代化を受け、明治二〇年代には衰退の兆しを見せしていく。『わかれ道』が発表されたのと同年、明治二九年六月の『風

俗画報』には、黒煙を燦らせ稼働する「芝浦製作所」を記した記事が特集されている<sup>(二六)</sup>。お京や吉三が生きた明治二〇年代後半は、江戸期から一帯に息付いていた手工業が、軍需景気と大型資本の参入によって完全に解体・吸収されつつある、時代の変節点であった。

さて、『にぎりえ』と同様、『わかれ道』もまた、工場や銘酒屋、貧民窟を舞台とする物語である。しかしながら、祖父から三代に渡る来歴を話して聞かせた『にぎりえ』のお力とは異なり、『わかれ道』のお京は、「仕事師のお京は今年の春よりこの裏へと越して来し者なれど」と語られるのみであり、未定稿<sup>(二七)</sup>においては「十四のとしに父親が死んで以来のべつに人の台所から這入つて、お世辞の安売りをして、馬鹿にされて」（筑摩全集未定稿BⅡ1）・「両刀たばさんだ流れの末が」（BⅡ1）・「おたがひにこんな身で居るのは余り嬉しくも無かるうではないか、私はこれからやはらかづくめ世を経ようかと思ふよ」（BⅡ2）という一連の記述があるものの、決定稿では悉く削除されている。おそらく、明治二九年当時の読者とすれば、「上」における吉三「傘屋」・「新網」・「お前さんなんぞは以前が立派な人だと言ふから」という記述さえあれば、未定稿における削除部は「読まずとも察する」事柄であつたのではないか。『港区史下巻』「近代」は、幕末期から明治初期における武士の衰微の様子を詳しく記している。

(…) 明治元年（一八六八）の江戸は、繁栄の面影はどこにもなく、市民の地方への逃散によって人口は半減し、産業はもは

や回復できないと思われるほどに破壊され、都市としての昨日も半ば停止した。とりわけ武家地であつた港区地域ではその影響が著しく、衰微もその極点に達していたので、復興をどこから手をつけてよいかわからない状態であつた。（三三八項）

『わかれ道』発表は一八九六（明治二九）年であり、「衰微の極点」にあつた明治元年からわずか二八年しか経っていない。明治元年前後の動乱は人々の記憶に新しく、士族身分の撤廃による混乱も未だ収まらぬ時代であつただろう。士族階級には当然女性もいたわけで、そうした女たちはどのような道を辿つたのか。それを探るため、家族社会学者である森岡清美の考察を取り上げたい。森岡は「華族社会と娶妻習俗」<sup>(二八)</sup>において、明治初期の娶妻風俗にふれ、明治一年における東京在住華族三九五家の戸籍を収録した文書『明治十一年季四月戸籍草稿』をもとに、華族の妻と妾の出自について統計的分析を行っている。

(…) 妻の実家はほとんどが華族であつて（八三％）、皇族（宮家）の例もごく稀にある。士族は一五％あるが、伯爵以下において見られるにすぎず、かつ士族といつても旧大名の一門一族といった門地の高い士族にかぎられるようである。さらに、大名華族の子爵以下で稀に平民もみられる。これは一八一七年八月の婚姻自由令公布の後、妾を妻に、とくに後妻に引き直したものであるかと思われる。他方、妾の実家には華族が少なく、

みな士族か平民であることは特筆に値する。全体として士族より平民の方が多いが、士族人口が総人口の数%しか占めなかったことを考慮すれば、士族の娘の出現率が極めて高いと云わなければならない。妻は夫と同じ旧公家か旧大名家の出であるのに対して、妾は旧藩士、旧地下官人、旧公家の家士や出入りの医師、社家、寺侍、あるいは町人の娘という社会的な身分差は、主人側に位置する妻に対しては妾は使用人である家内秩序に照応している。一口に士族といっても、上は旧大名の一門一族から、下は徒士・足輕に至るまで、あるいは旧幕臣の高家・寄合・旗本・家人、さらに官家士族など、さまざまな旧身分を含んでおり、また、平民といっても、農工商の職業差とそれぞれの内部で分化した身分差があった。妾の実家が士族と平民の中でのような旧身分に属したのか。明治初における士族の没落を背景として、妾の出身旧身分を探ることは社会的な興味を唆る課題であるが、『戸籍草稿』はただ何府・何県士族とあるいは平民何某何女と記し、平民の中に多分町人であろうことを推測させる記載が稀に散見するのみである。したがって、妾についてさらに出身旧身分を詮索する作業は、妻の生家が士族や平民である例外的ケースとともに、個々の事例の考察に譲るほかない。

(二七四―二七五項)

森岡が補足するように、妾の詳細な出身ごとの身分差を特定しうる資料が存在しない以上、それを統計的に分析することには限界があ

る。だがしかし、当時の上流階級における娶妾習俗にあつては、中・下級士族に類するような没落士族の娘が多くそこへ流入した可能性を検討するには十分である。

また森岡は娶妾習俗に対して、世論が否定的な動向へと向かっていったことにも筆を進めている。不平等条約改正のため、外交上の理由から文化規範や倫理規範を欧米並みに近づけようとの政府の政策的な事由に加え、森有礼や福沢諭吉といった世に影響力を持つ人物が廃妾について発言した。森有礼はもっぱらキリスト教的世界観に照らして廃妾を唱え、福沢諭吉も基本的には廃妾の立場をとっていたが、一方で妾を「若しも当時妾を放逐して正室のみに任したらば、大名の家は迎も三百年を持続す可からず。今其然らざるは之を妾の効力と云はざるを得ず」と評価してもいた。その福沢の論が新しい局面に入るのは、『わかれ道』発表と同年の明治二十九年のことである。

(…)「我が邦にて本妻の外に妾を置くは古来の習慣に怪しまざる所なれども、彼国人の眼より見れば恰も公然一夫多妻の実を行ふものにして驚かざるを得ず。」と指摘し、他方、「西洋の耶蘇国に於ては、男女の關係、甚だ潔白にして人に語る可らざるものなし」とは、「単に彼の表面を見たる談にて、裡面に立入りて其内幕を摘きたらば、言ふ可らざるの醜事甚だ多きこそ事実なれ」として、日本人の公然の醜と西洋人の裡面の醜を対比したうえで、「今の文明の大勢に反する国風の独立は甚だ難しきを

知る可し」という立場から、西洋流に「只その裡面の醜を裏んで外に現はさず、表面は飽くまでも清潔にして体裁を美にすること、文明世界に処する日本人の心掛なりとして之を大切に思ふものなり」と結論している。つまり、妾を置くなどとは言わず、ただこれを隠して秘密にせよと主張したのである。(三八七—三八八項)

江戸以来の娶妾習俗では、いわば公然の「秘密」として妾の存在が認知されていたものの、条約改正のため欧化政策がとられた結果、妾はひそかに「秘匿されるべきもの」として、「存在はしているが、いない」ものとなった。そうした時代に、あからさまに妾を「弊風」と決めつけ、その存在を暴いたのがジャーナリスト、黒岩涙香である。

黒岩は一八九八(明治三一)年七月七日から九月二〇日にかけて、日刊紙「萬朝報」において「弊風一斑 蓄妾の実例」という記事を連載した。妾を持つ男性に反省を促すべく、犬養毅や黒田清輝、森鷗外ら五一〇例をあげ、これを批難している<sup>(二九)</sup>。娶妾風俗は、江戸期、それも武士や公家にあつては、家の存続のために必要なものであり、なかば公然と是認されたものであったが、明治を迎え、西洋諸国と平等な関係性を結びたいと考えた時に足枷となった。それゆえに、娶妾習俗には倫理的に問題があり、秘匿すべきものだという世論が形成されていったのだろう。お京の出自が士族階級であると仮定した時、旧時代の価値観からすれば、特権階級での娶妾習俗

は家の存続のためによくみられたものであり、ことさら嫌悪されるべきものではない。だが、明治維新後の条約改正に向けた欧化政策の中で、広く国民に対して「妾は秘匿し、蔑み批難されるべきものである」という規範が浸透していけば、価値観も変化していく。したがって、おそらくは士族階級の出身でありながらも、妾奉公を「寧ろその腐れ縮緬着物で世を過ぐさうと思ふのさ(下)」と自嘲するお京は、明治以前の歴史の時間に引きずられながらも「近代」の価値観を内面化した人物であつたといえるだろう。

こうした娶妾習俗は小説の格好の題材ともなり、大富豪葛城余五郎の三人の妾たちと妻との交渉を描いた尾崎紅葉の『三人妻』(明治二五(一八九二)年発表)や、創作された年代はくだるが、明治初期を舞台とした田地主子版『三人妻』とも言える『女坂』<sup>(三〇)</sup>(昭和三二(一九五七)年発刊)といった作品が編まれている。

#### 4 『わかれ道』における「歴史の時間」と「恩寵の時間」

蓮實がその論考において、「新開」の銘酒屋の酌婦、お力が「新開の時間」と「歴史の時間」の交錯がもたらす葛藤に直面することなく生を享受することのできる時間を「恩寵の時間」としていることはすでに触れた。『わかれ道』の舞台と思しき麻布一帯、しかも吉三が励む傘屋は、「新開」のように過去の歴史が切斷された場所ではない。むしろ江戸以来の伝統産業と没落士族の負の歴史とが色濃く息づく場所である。しかしながら同時に、明治維新における激甚な変



化を体现している土地でもある。維新による武家地の荒廃と江戸以来の手工業の衰退、それと対になって発展していく芝浦製作所をはじめとする工場の勃興――。そして、吉三が拾われた芝新網は、江戸以来の貧民窟としてその名が知られ、明治を迎えるや国民国家の中に潜む病理として社会改良の対象としてもまなざされるようになっていく。同様に、士族階級の娶妻習俗は是認されてきたが、これも欧化政策によってにわかに恥ずべきものであるとする価値観が植え付けられ、糾弾されるようになる。

お京や吉三は、江戸が色濃く残る街に暮らしながらも、近代という時代の波の影響を強く受ける存在であった。そのような二人を中心人物に据えた物語が、『わかれ道』なのである。

吉三は新網の角兵衛の子供であり、「太つ腹のお松」に拾われ、傘屋の油引きになった。しかし、それは貧民窟育ちという彼の「歴史の時間」を打ち消すものとはならない。

(…) 生れると直さま橋の袂の貸赤子に出されたのだなど、朋輩の奴等が悪口をいふ(上)

傘屋の「朋輩」は皆、吉三の「歴史の時間」を知っており、吉三がそれを語るか否かに関わらず、「歴史の時間」を知る人々の中で生きていかねばならないという意味で、新網と傘屋は連続している。また、「大人三人前を一手に引受けて鼻歌交り遣つて除ける」ほどの腕前も、「新網に返るが嫌やなら此家を死場と極めて勉強をしなけ

りやあならないよ」とお松に言い含められた「丹精」の結果であり、努力なしのことではない。では、お京はどうか。自身の来歴を一切明かすことなく生活しており、その意味においては「新開の時間」を生きているともいえるが、「小指のまむしが物を言ふ」ほどに変形した指は、「彼れほど利く手」がどれほど自身の肉体を酷使した結果であるのかを物語っている。したがってお京は、蓮實の言う「みずから何ら努力することなく、あたかも天から授かったような」類い稀な「天然の資質」を存分に行使しているとまでは言い切れない。

また、「何うして彼の顔で仕事やが通せる物か」と傘屋の半次に言われるほどの美貌は、「仕事や」の身体としてどこかチグハグな印象を周囲に与えている。だが、「恩寵の時間」というべきものが全くこの傘屋の裏長屋に流れていなかったのか、というと、そうとも言えない。笠間はるなは「わかれ道」論――葉テキストにおける「独白」と「会話」(三三)において、吉三にとつてのお京の存在とは、「自己を語り受け止められることへの吉三の願望」が向けられる相手であり、そこには「甘えとあやし」という関係が見られると指摘する。この笠間の捉えは、「上」における吉三とお京の関係を鋭く捉えたものである。

例えば、『わかれ道』「上」には、このような記述がある。

(…) 本當に自家の吝嗇<sup>うち</sup>ぼうめ八釜しい小言ばかり言ひやがつて、人を使ふ法をも知りやあがらない、死んだお老婆さんは彼んなのでは無かつたけれど、今度の奴等と来たら一人として話

せるのは無い、お京さんお前は自家の半次さんを好きか、随分嫌味に出来あがつて、いゝ気の骨頂の奴では無いか、己れは親方の息子だけれど彼奴だけは何うしても主人とは思はれない番ごと喧嘩をして遣り込めてやるのだが随分おもしろいよ（上）

これは吉三が傘屋に拾われてからの時間の質の変化を知る上で重要な一節である。吉三を拾った「先代のお老婆さん」が存命であった時代と、その次の世代とで、吉三の扱いが変化したのではないだろうか。おそらく、お松が存命の頃、代替わりする前の時代の傘屋には吉三にとって「話せる」人がいたが、代替わり以降はいなくなつた。したがつて、そこに現れたお京は吉三にとって唯一の「話せる」人であり、吉三とお京の、「互いの内情には決して深く入っていかないのだが、入っていかない限りにおいては、「甘え」と「あやし」という、互いがその現実に決して「期待」できないものをもたらし「くれる」と笠間が指摘するような時間が、お京の長屋に流れていたと考えられる。「互いの内情に深入りしない」というのは、「歴史の時間に深入りしない」ために必要な二人なりの暗黙の約束であり、一見、吉三が自らの「歴史の時間」について語っているかのように見える「上」であるが、その実その語りは、あくまでお京を「親類らしい者」に見立てた上での「甘え」と「あやし」を楽しむための手段に過ぎない。話す内容が重要であるというよりも、話すことそれ自体が意味を持つ類のものである。傘屋の代替わり以降、主人一家と「話せる」関係を築くことのできぬ吉三は、「何處からか斯うお

前のやうな人が己れの眞身の姉さんだとか言つて出て来たら何んなに嬉しいか、首つ玉へ嚙り付いて己れは夫れ限り往生しても喜ぶのだが（上）」と、お京を相手に自らの願望を語る。吉三は「眞身の姉さん」を持たないが、お京の部屋を訪うたびに、「理想の姉さん」と話すことはできる。このように、「互いの内情に深入りしない」会話によつて「新開の時間」に「歴史の時間」が滲出することを巧妙に回避し、「甘え」と「あやし」の中に身をおいているという意味においては、蓮實のいう「恩寵の時間」がまさにそこに流れているといえるだろう。したがつて、『わかれ道』「上」における吉三の「歴史の時間」の独白は、『にぎりえ』において、お力が結城朝之助に對して行つた、「歴史の時間」をひきずりだし、「恩寵」を「失寵」に転じせしめる「告白」とは質を異にしている。それが明らかになるのが、お京の妾奉公が明かされる「下」である。

（…）己れも傘屋の吉三だ、女のお世話には成らないと言つて、寄かゝりし柱に背を擦りながら、あゝ詰まらない面白くない、己れは本當に何と言ふのだらう、いろいろの人が鳥渡好い顔を見せて直様つまらない事に成つて仕舞ふのだ、傘屋の先のお老婆さんも能い人で有つたし、紺屋のお絹さんといふ縮れつ毛の人もお絹さんはお嫁に行くを嫌やがつて裏の井戸へ飛込んで仕舞つた、お前は不人情で己れを捨てゝ行し、最う何も彼もつまらない、何だ傘屋の油ひきになんぞ、百人前の仕事をしたからとつ

て褒美の一つも出やうでは無し朝から晩まで一寸法師の言れ  
つゞけで、夫れだからと言つて一生立つても此背が延びやうか  
い、待てば甘露といふけれど己れなんぞは一日一日嫌な事ばか  
り降つて来やがる

この吉三の語りこそ、「恩寵」を「失寵」に転じせしめる「告白」で  
あったのだと考える。結城朝之助がお力にその心内を語らせ、「新開  
の時間」を破壊するような姿をもつて、主人公の行き先を変えよう  
とした、それと同じことがここで起こった。そうであるとするなら  
ば『わかれ道』において結城朝之助の役割を果たしたのはお京にほ  
かならない。そしてこの「告白」において何より注目すべきは、「己  
れも傘屋の吉三だ、女のお世話には成らない」という言い出しだ。  
ここで吉三が言う「女」には系譜がある。吉三を新網で拾い、傘屋  
の小僧として仕込んでくれた「傘屋の先のお老婆さん」に始まり、  
その亡き後は「縮れつ毛」の、「紺屋のお絹さん」が吉三を可愛がっ  
てくれ、さらにお絹が自死して後は「お前（お京）」という、一連の  
吉三を庇護し、「好い顔」を見せた女たちである。この女たちは全て、  
吉三にとって「自己を語り受け止められることへの吉三の願望」が  
向けられる相手であるが、おそらくそれにとどまらない意味が付与  
されている。

未定稿Ⅱ(三)の3の記述を参照すると、

すはりこみて、誰が追へども動きさうにもせぬを、主人の佐吉

と作りと見て、喰は背てやれ、喰はせてやれ、あれみな瘦せた  
やうな面をして居る、定めしひもじい事であらうとて臺処へ呼  
込まれしを嬉しく、今夜は物おきの隅へでも寝かして下さいま  
し、家へ歸るといぢめ殺されますからとて、しくくなきをする  
に、仕方が無い泊まらせてやれと、大腹中の佐吉ことゝも思は  
ず見ずしらずの角兵衛を家の内へ入れて、お前さんもしやどろ  
ぼうの手引きではないかと女房の恐ろしがるを、馬鹿を言、あ  
んなちつほけの小僧ツ子に眼をくらまされる己れではないわ、  
小室やの佐吉はそんなのでは無い、みぢめなさまをして泣いて  
居る物をつまみ出すも大人気がないこと、もし親じがやかまし  
く言つて来たら其時の事案じなさんなど、捨てゝ置いての明く  
る日、手まへ傘やの職人に成る気は無いか、

とあり、決定稿では「傘屋の先代に太つ腹のお松とて一代に身上を  
あげたる、女相撲のやうな老婆さま」と記されているものが、こ  
では「大腹中の佐吉」、「小室やの佐吉」と、男性として設定されて  
いる。しかも、「小室やの佐吉はそんなのでは無い」という啖呵は「己  
れも傘屋の吉三だ」という吉三の威勢の良さを思わせ、人物造形の  
点からも吉三と通ずるものを感じる。吉三にとつての「父」ともな  
りうるやうな「佐吉」が女の「お松」へと書き換えられたのは、吉  
三を庇護する存在を「男」に設定したくないという一葉の意思、つ  
まり、吉三に「社会的父」を与えまいとする意思が働いてのことでは  
ないのか。

母型社会を例にとり研究を行った人類学者、マリノウスキーは、著書『未開家族の論理と心理』「第九章 嫡出の原理と性的自由の原理」(二三)にて、このように述べている。

(…)すべての人間社会においては、父は伝統によって必要不可欠のものとみなされる。女子は適法に受胎の許される際には、以前に結婚しなければいけない。すなわち、換言するならば、未婚の母は制裁せられ、父のない子は蔑まれるのである。これは決してヨーロッパ的あるいはクリスト的偏見ではない。これはまた同様に大概の野蛮、未開民族の間にも見出される態度である。(略)

これをもつと精緻な抽象的ことばで述べてみよう。受胎を社会学的に適法的事実と限定する諸条件の中には、根本的に重要なものが一つある。親族関係の生理学的側面に関するもつとも道德的なそして法律的な規則は、いかなる子供も、社会学的父(sociological father)の役割を担う人、すなわち、監護者であり保護者であつて、子供と社会の爾余の人々を結びつける一人の男子——しかも一人の男子であることは勿論である——なくしてこの社会に生まれるべきものではないことである。(五五項)

マリノウスキーは、生物学的父(血縁関係のある父)も含め、およそ父という存在は「社会的父」という形態を取るしかない指摘し

ており、そしてその社会的父によって、家族は社会に適法な存在として認められることになる。換言すれば、社会的父なしにはいかなる母子も適法に社会に認知され得ないということであり、マリノウスキーはそれを「嫡出の原則」という言葉で説明する。

『社会政策時報』に「私生児が多い」と指摘される新網から拾われ、「遂にしか親類らしい者に逢つた事も無い」、つまり生物学的父の庇護を受けぬ吉三に、一葉は社会的父をもあてがわなかった。吉三は物語の創造主によって、この「嫡出の原則」から排除されている。お松は確かに吉三を新網から拾いあげてはくれたが、代替わりした途端、「一人として話せるのは無い」境遇となる。それこそが、「女」では子を世に認めさせうる力を持ち得ず、子は不安定な足場で社会に立ち続けねばならないということの何よりの証であろう。また、そこには「半次」の存在が大きく絡んでくる。半次は、代替わりした傘屋の主人の子、つまり、「嫡出の原則」に護られた子である。この半次に対して吉三はあからさまな敵意を見せる。

(…)お京さんお前は自家の半次<sup>うち</sup>さんを好きか、随分厭味に出来あがつて、いゝ気の骨頂の奴では無いか、己<sup>お</sup>れは親方の息子だけれど、彼奴ばかりは何うしても主人とは思われない番<sup>ばん</sup>ごと喧嘩をして遣り込めてやるのだが随分おもしろいよ(上)

お京が「吉ちゃんの様な暴れ様<sup>さん</sup>が大好き(中)」と称する吉三の「火の玉の様(中)」な性質は生来のものではなく、嫡出の子、半次への

敵意から立ち上がってきたものとも考えられる。お京の妾奉公に対して、吉三が徹底した拒絶を貫くのは、笠間が指摘したような「自己を語り受け止められることへの吉三の願望」が向けられる相手を喪失してしまうという理由の他にも、嫡出の子に対して、いわば「私生児」としての意地があつたのではないのか。

(…) 一昨日自家の半次さんが左様いつて居たに、仕事やのお京さんは八百屋横町に按摩をして居る伯父さんが口入れて何處のかお邸へご奉公に出るのださうだ、何お小間使ひと言ふ年ではなし、奥さまの御側やお縫物しの譯は無い、三つ輪に結つて総の下つた被布を着るお妾さまに相違は無い、何うして彼の顔で仕事やが通せる物かと此様な事をいつて居た、己れは其様な事は無いと思ふから、間違ひだらうと言つて大喧嘩を遣つた

(下)

お京宅に足繁く出入りし、「仕事やの家へ行つて茶棚の奥の菓子鉢の中に、今日は何が何箇あるまで知つて居るのは恐らく己れの外には有るまい(中)」と自負する吉三にとつて、これを半次から聞かされたことは、彼の矜持をひどく傷つけたはずである。さらに、吉三の「番ごと」に及ぶ半次との「喧嘩」は、吉三が半次を「遣り込めてやる」が故に「おもしろい」のだが、今回ばかりは常とは異なる決着を見ることになる。

(…) 一昨日半次の奴と大喧嘩をやつて、お京さんばかりは人の妾に出るやうな腸の腐つたのでは無いと威張つたに、五日とたゞずに兜をぬがなければ成らないのであらう、そんな嘘吐きの、ごまかしの、欲の深いお前さんを姉さん同様に思つて居たが口惜しい(下)

半次に対して圧倒的に有利であつたはずの「大喧嘩」に、「五日とたゞずに兜をぬがなければ成らない」展開となつたことは、お京への決別の言葉に弾みをつけただろう。このように考えると「己れも傘屋の吉三だ、女のお世話には成らない」と、おのれの職業に精神的な抛り所をおき、そこにプライドを持つていながらも、「最う何も彼もつまらない、何だ傘屋の油ひきになんぞ、百人前の仕事をしたからとつて褒美の一つも出やうでは無し」と、あつさり言い切っていることに合点が行く。いくら「百人前の仕事」をしたところで、社会的父を持たない吉三と、嫡出の子である半次とでは最初から勝負にならないからだ。さらに「朝から晩まで一寸法師の言れつゞけで、夫れだからと言つて一生立つても此背が延びやうかい」と続く台詞からは、吉三が何重にも社会から疎外されていることを思い起こさせる。吉三の「年は十六なれども不圖見る處は一か二か、肩幅せばく顔小さく、目鼻だちはきりと利口らしけれど何にも背の低くければ(上)」という肉体的特質を鑑みると、吉三の身長は当時の男性の身体の基準(二四)から外れていたことが予想される。吉三の体格では徴兵の対象にもならず、一般的な男性の身体を想定して標準化さ



れた工場の機械装置に人間が合わせていく芝浦製作所のような大工場での労働要員としても不適格であったろう。生物学的・社会的に双方の庇護なく、さらには、自己の身体までもが吉三を疎外する。その上での「女のお世話には成らない」という宣言は、社会から幾重にも疎外された吉三が慰めを求める対象すらをも、自らの言葉によつて排除したということに他なるまい。ここにおいて吉三は、「おもしろくもない」「歴史の時間」をいつときでも忘れさせてくれるような「甘え」を許してくれる「女」の存在を、「最う誰れの事も當てにする物か(下)」と切り捨てることができるのだ。

お京に「甘え」、「あやし」てもらえる時間が吉三にとつて「恩寵の時間」であるとするならば、お松、お絹という「女」の系譜に一見連なるかのように見えるお京は、「恩寵の時間」を自ら終わらせてしまう告白をさせてしまったという点において、それまでの女とははつきりと異なる存在である。まさしくお京こそが、「妾奉公」というカードを吉三に突きつけることによって「メフィストフェレス」の役を演じている女であったのだ。

## 5 「捨子」は誰か

菅聡子は「孤児たちのゆくえ」<sup>(二五)</sup>において、『琴の音』の金吾、『やみ夜』の直次郎、『わかれ道』の吉三のように、一葉の小説にたびたび登場する孤児と、一葉自身の持つ孤独感とを重ね合わせ、興味深い考察を行なっている。

(…)『さをのしづく』(明治二十八年頃か原本は散佚している)と題された断片の中で、一葉は紫式部と清少納言を比較している。

小納言に式部の才なしといふべからず 式部が徳は小納言にまさりたることもとよりなれどざりとて小納言ををしめるはあやまれり 式部は天つちのいとしごにて小納言は霜ふる野辺にすて子の身の上なるべし あはれなるは此君の上や

この文中、一葉は『源氏物語』を「千古の名物」とし、さらに紫式部の「徳」が清少納言にまさっていると認めている。そのうえでなお、一人の女性としての清少納言を「あはれな」と言う。それは一葉が「霜ふる野辺にすて子の身」である清少納言に、自分自身の姿を投影しているからにはかならない。おそらく一葉は、「いはゞ富家に生れたる娘のすなほにそだちてそのほどくの人妻に成たるもの」という式部に、三宅花圃の姿を重ねた。そして「はかぐしき後見」もなく宮仕えの人々に立ち交じり、ことさらにその「才」を示す以外には、その存在を周囲に認めさせる手だてをもたなかった清少納言に、萩の舎入門の当時の自分をみたのである。

花圃と自分を比較したときに感じずにはいられない、作家としての外的条件の不遇や、〈女戸主〉として母たきや妹邦子の生活を背負わなければならなかった苦悩は、一葉の中に〈野辺

の捨て子」のような孤独感をうえつけていった。そして、作家として世に知られ始めるにつれて、彼女に向けられた人々の視線は、彼女の孤独をより深めていった。「かゝる界に身を置きてあけくれに見る人の一人も友といへるもなく我れをするもの空しきをおもへばあやう一人この世に生まれし心地ぞする」(『ミつの上』明治二十九年二月二十日)と記した一葉が見いだしたのは、「霜ふる野辺にすて子の身」としての自分だった。(一六七―一六九項)

菅は一葉に「すて子」という文筆家としての自認があったと指摘する一方で、『わかれ道』への読解においては「出世」という言葉を中心に据え、それが吉三、お京のいずれにあったのかという点を焦点化し論を立てている。

(…)「仕事屋」のお京は、女が一人の人間として生き、また評価されることに対する幻想を、放棄するか否かの〈わかれ道〉に立っていた。一方吉三が切望するのは、お京と姉と弟のように暮らしていくこと、という家族に対する幻想に基づいた未来の時間であった。物語の冒頭から二人の抱く幻想は食い違っている。お京は一貫して男の「出世」レベルで話している。だが、「新網」出の吉三は、男の「出世」、すなわち明治近代が示して見せた「立身出世」の可能性から、最初から排除された存在であった。

ここでもう一度〈わかれ道〉の意味に立ち戻ろう。それはお京にとつての人生の岐路であり、お京と吉三の別れ道でもあった。だが、吉三の前に、自分で選ぶことのできる選択肢は存在しない。そのような彼だからこそ、お京の選択を逆照射する存在となりうるのである。「お京さん後生だから此方の手を放してお呉んなさい」という言葉にむち打たれたとき初めて、お京は自分の「出世」が本当に意味するものと、そしてそれを自ら選んだのだということ向き合ねばならない。そして吉三もまた、「皓々と照し給ふ」「天上のお月さま」のもと、お京の部屋から一人「霜ふる野辺」に出て行かねばならないのである。(一六九―一七〇項)

お京が自身の「出世」として成した決断を、彼女自身へ「逆照射」させるために、「自分で選ぶことのできる選択肢は存在しない」吉三の存在が必要であり、そうしたお京の選択の結果、吉三は「お京の部屋から一人「霜ふる野辺」に出て行かねばならない」と菅は説く。しかしながら、この指摘は、結果としているものと、その結果に導く作用とが「逆」であると筆者は考える。つまり吉三が「お京の部屋から一人「霜ふる野辺」に出て行」くことを、ほかでもない吉三自身が「自分で選ぶことのできる選択肢」としてとるために、お京は「妾奉公」という決断を突きつけたのではないのか。至極単純な言い方をすれば、お京のための吉三ではなく、吉三のためのお京、ということである。

菅が示して見せたように、恵まれた条件のもと、一足早く小説家としての才を見せ、坪内逍遙という文壇の庇護者のあつた三宅花圃と比べると<sup>(二六)</sup>、一葉が自らを、「かゝる界に身を置きてあけくれに見る人の一人も友といへるもなく我れをするもの空しきをおもへばあやう一人この世に生まれし心地ぞする」と、吉三と同じ、「孤児」として自己を捉えたとしても不思議はない。むしろ、そのように己を認識しそこから出発すること、すなわち積極的に「孤児」性を自認し、清少納言と同様、「野辺のすて子」として歩み出すことこそが、一葉が「あはれなる」と評価した生き方であつたのではないだろうか。西川祐子は『私語り樋口一葉』第四章「水の上日記にいたる」にて、当時金銭的援助をめぐって妾となるよう持ちかけていた久佐賀義孝とのやりとりから、『わかれ道』において一葉はお京に自己を投影したと言及しているが<sup>(二七)</sup>、一葉が強く己を投影したのはお京ではなく、吉三であつたと筆者は考える。「孤児」から「すて子」として「一人「霜ふる野辺」に出て行」く吉三にこそ、一葉は己の姿を重ね合わせたのだ。

ここで、蓮實重彦の「完璧な捨子を求めて」<sup>(二八)</sup>における知見を参照したい。

(…) たまたま、両親の一人が欠けてしまった場合、社会は義理の父、義理の母を捏造してまで子を捨てずにおこうとする。それは、いったい何故なのか。孤児や私生児を主人公とする小説のほとんどは、村上龍の『コインロッカーベイビーズ』がそ

うであるように、親は子を捨てないし、また捨ててはならないという共同体的な慣習の物語にほかならない。そして中上健次は、そのことに猛々しい苛立ちを覚える。自分は共同体の外に出てみたくなぬからである。そうした物語が流通している限り、自分のまわりでは、親しい肉親の何人かが無残に狂い、無残に自死してゆく。(略) こうした物語に抗うには、いわば完璧な「他者性」ともいうべき存在、自分自身に対してさえ他者たらざるをえないような状況を引き寄せねばなるまい。

そのとき秋幸は、不可避免的に無根拠な選択を行う。捨子の物語からは決定的な外部に位置しようという選択である。捨子の物語ではなく、物語の捨子である自分を実現すること。だが、その実現のためには、誰よりも「完璧な捨子」の物語を試練としてくぐりぬけねばならない。また、そうすることによってしか、「完璧な捨子」となるための「法」を探りあてることができないだろう。(二四八―二五〇項)

蓮實は、村上龍の『コインロッカーベイビーズ』におけるハシやキク、中上健次の『枯木灘』における秋幸を例にとり、それら小説に一貫した構造があると指摘する。蓮實がここで主張しているのは、「かなりの数の小説」が、「宝探し」の旅に出發し、それが達成されるか否かをめぐって語り継がれる物語である、ということである。ハシやキクは宝(ダチュラ)を追い求めるが、「捨子の物語からは決定的な外部に位置しようという選択」を行う「真の意味での捨子」



である秋幸にはその宝にあたる具体的なものが設定されない。その代わりに秋幸が追い求めるものが、「完璧な捨子」となるための「法」である。その法を探り当てるためには、「捨子の物語」ではなく、「物語の捨子である自分を実現する」ための試練をくぐりぬけねばならないとし、その「試練」にあたるものが、「肉親の自死や狂気をみずからの体験として引き受けながら、しかも、狂ったり死んだりすることなく、その向こう側まで行きつくこと」であるのだ。『わかれ道』の吉三もまた、『枯木灘』の秋幸のように「完璧な捨子」となるための「法」を探り当てるため、さまざまな試練に耐えねばならぬ存在であったと考えることはできないだろうか。吉三は実の親や庇護者を持たぬ「孤児」ではあるが、『コインロッカーベイビーズ』におけるハシやキクのように、実の親に捨てられた、生まれながらの「捨子」ではない。だが、『枯木灘』の秋幸が、実の親がありながら「捨子」としての自己を自ら選び取るのと同様に、吉三もまた、「孤児」であるがゆえの、肉親を希求してやまない心理的欠如感を乗り越え、「完璧な捨子」となるべく、「一人「霜ふる野辺」に出て行」くための宝を探す物語となっている点は共通している。

吉三は「新網」からお松に拾われ、傘屋の小僧になるにはなったが、代替わりにより庇護者を失う。無論それは、吉三が主体的に選択した結果としてのものではない。吉三に庇護の手を差し伸べてくれた傘屋の「お松」は中風になって死んでしまい、ついで吉三を可愛がってくれた紺屋の「お絹」はお嫁に行くのを嫌がって井戸へ飛び込んでしまう。そこに現れた仕事師の「お京」が「妾奉公」を選

びとることで初めて、吉三は「次の女」を待つことを自ら放棄し、「人をつけ、最う誰れの事をも當てにするものか、左様なら（下）」と立ち上がるができるのだ。つまり、吉三にとつての法（宝）の発見とは、吉三が「完璧な捨子」となることを妨げている孤児ゆえの心理的欠如感を取り去ることであり、そのためには、その「欠如」を埋めてくれる「女」たちから自立せねばならない。その自立がない限り、吉三の周囲の女たちは「直様つまらない事に成」り続ける。従って、物語の終わり、お京に「羽がいじめ」にされた吉三は、「完璧な捨子」となって、「一人「霜ふる野辺」に出て行」くために、こう言わねばならない。「お京さん後生だから此肩の手を離してお呉んなさい。（下）」と。

「完璧な捨子」となるための最後の試練である、「女たちから自ら捨てられる」存在となることは、まさしく吉三が「物語からの捨子」となるために主体的に選択したものである。『わかれ道』以前に描かれた一葉の小説、『琴の音』<sup>(三九)</sup>では、実の母に捨てられ、父親も喪い孤児となった金吾が、ある時お静の奏でる琴の音によって、「巖のやうにかた」い「ねぢけゆく心」がほぐされ、「かねては悪魔と恨みたる母の懐かしさ」へ身にしてみて、金吾は今さら此世のすて難きを知「るところとなる。「完璧な捨子」になりつつあった金吾が、再び「母」に引き戻されていく『琴の音』の結末と比較すると、吉三のこの選択は好対照をなしている<sup>(三〇)</sup>。

このように、『わかれ道』を吉三が「完璧な捨子」となるための物語と読むのならば、お京は吉三を「完璧な捨子」にするための役割

を負う人物であつたという見方が成り立つ。その視点からお京の発言を振り返ると、お京は「上」の段階から吉三に「完璧な捨子」となるための「法」を示唆しているかのようでもある。

(…) お京さん己れが本當に乞食の子ならお前は今までのやうに可愛がつては呉れないだらうか、振向いて見ては呉れまいねと言ふに、串談をお言ひでないお前が何のやうな人の子で何んな身か夫れは知らないが、何だからとつて嫌やがるも嫌やがらないも言ふ事は無い、お前は平常の氣に似合ぬ情ない事を  
お言ひだけれど、私が少しもお前の身なら非人でも乞食でも構ひはない、親が無からうが兄弟が何うだらうが、身一つ出世をしたらば宜からう、何故其様な意氣地なしをお言ひだと励ませば、己れは何うしても駄目だよ、何にも為やうとも思はない、と下を向いて顔をば見せざりき。(上)

ここでお京の用いる「親が無からうが兄弟が何うだらうが、身一つ出世をしたらば宜からう」という「励ま」しは、昔の研究がそうであつたように、明治近代の「立身出世」の文脈として捉えられてきた。しかし、いまこれを「完璧な捨子」となるための法を獲得せよ、というものとして読むことはできないか。つまり、「上」での吉三は未だ「孤児」故の心理的欠如感に囚われた己から脱却できず、お京への「甘え」と、お京からの「あやし」の外へ出たくないがために、「己れは何うしても駄目だよ、何にも為やうとも思はない」、

と「下を向」く。この吉三を「完璧な捨子」とするためには、吉三が求めるがままに「あやし」を与える今までのお京ではいられず、したがって、「下」にあるような変貌を見せなければなくなる。

ところで、『わかれ道』における「捨子」性というのは、吉三にだけ見られるものだろうか。蓮實の『小説から遠く離れて』は、この問題にも回答を用意している。つまり、多くの小説が「双子の兄弟」を持つ主人公を持つており、その双子の片割れが、ともに「宝探し」という振る舞いを助ける補助者としての役割を果たすのだというものである。したがって、『わかれ道』におけるお京もまた、物語のある段階までは「完璧な捨子」となるための試練に耐えてきた存在、といえよう。「以前が立派な人」と吉三に言われるお京であるが、お京自身は自らの来歴について一切語らない。先に確認したように、未定稿(三)においては「十四のとしに父親が死んで以来のべつに人の台所から這入つて、お世辞の安売りをして、馬鹿にされて」(B 1)・「両刀たばさんだ流れの末が」(B 1)という記述があるものの、決定稿では悉く削除されている。自らの過去を語ることせず、「歴史の時間」とは別の時間を、彼女は来歴不明な「仕事師のお京」として傘屋の裏の長屋で生きようとしたのではないのか。つまり、お京は、この「長屋」で、仕事師(お京にとつての歴史の時間とは接続しないもの)としての矜持を保ち続ける限り、例えばそれがお京にとつてどんなに過酷な時間であつたとしても、それは「捨子」としての「法」への獲得につながるものであつたはずである。ゆえに、「仕事師のお京」を脅かすような「お京さんに首つたけ(中)」な「質

屋の禿頭」には「喜んだ挨拶」をしない。一方で吉三には、「私は此様ながらくした気なれば吉ちやんの様な暴れさんが大好き、癩癩が起こつた時には表の米屋が白犬を擲ると思ふて私の家へ洗ひかへしを光澤出しの小槌に、砵うちでも遣りに来てくだされ、夫れならばお前さんも人に憎くまれず私の方でも大助かり、本に兩為で御座んすほどに（中）」と、積極的に吉三を呼び寄せている。これは、「首つたけ」な人間たちを、吉三を出入りさせることによって牽制する意図もあつたであろうが、それ以上に、「吉ちやんの様な暴れさんが大好き」と言うのはそのまま真実で、吉三に捨子としての振る舞いを見てのことであつたとも考えられる。また、そうした気質は「私は此様ながらくした気なれば」というお京のそれとも通づる。つまり、「上」における吉三とお京は「完璧な捨子」となるべく身を寄せ合う双生児なのだ。ゆえに、ともに「宝探し」をなさねばならない「姉弟」の片割れであつたはずのお京が「妾奉公」という道を選ぶことは、「以前が立派な人」という、「歴史の時間の成れの果て」としての道を選ぶこと、つまり「完全な捨子」となるための法を探る道からの脱落にほかならない。もしもお京の「歴史の時間」が先に見た未定稿通りのものであれば、それは、先述したように没落士族から妾へという明治初期の娶妾習俗で比較的良好に見られた形で「歴史の時間」に回帰していくことを意味する。だからこそ吉三は引き止めるのだ。

(…) 何もお前女口一つ針仕事で通せない事もなからう、彼れ

ほど利く手を持つて居ながら何故つまらない其様な事を始めたのか、餘り情ないでは無いかと吉は我が身の潔白に比べて、お廃しよ、お廃しよ、断つてお仕舞なと言へば、困つたねとお京は立止まつて、夫れでも吉ちやん私は洗ひ張に倦きが来て、最うお妾でも何でも宜い、何うで此様な詰らないづくめだから、寧ろその腐れ縮緬着物で世を過ぐさうと思ふのさ。(下)(…) 何もお前女口一つ針仕事で通せない事もなからう、彼れほど利く手を持つて居ながら何故つまらない其様な事を始めたのか、餘り情ないでは無いかと吉は我が身の潔白に比べて、お廃しよ、お廃しよ、断つてお仕舞なと言へば、困つたねとお京は立止まつて、夫れでも吉ちやん私は洗ひ張に倦きが来て、最うお妾でも何でも宜い、何うで此様な詰らないづくめだから、寧ろその腐れ縮緬着物で世を過ぐさうと思ふのさ。(下)

傘屋の主人の息子である半次、いわば「嫡出の子」に反目しつつ、「私生児」として「火の玉」のように生きる吉三は、未だ「完璧な捨子」ではないが、自らの「捨子」性そのものは十分に自覚している。その吉三の「潔白」さに比べ、お京の脱落は、いかにも「餘り情なく彼の目に映つただろう。」「完璧な捨子」となるための「法」を探り当てるには、狂わず自殺もせず現実と対峙し続けなければならない。だが、お京はもうその試練に「倦きが来て」しまった。『わかれ道』未定稿BⅡ1には、このような記述がある。

長火鉢の火をかきおこして、まあお焙りよ、何を考へているのだね、何にも不思議な事はない、こして来た者だから出て行くのだわね、をかしい人たつては無い、泣き顔をしてきとお京の笑ふに、それでもお前行先がをかしいもの氣に成つて仕方がない、善い処なのと問はれて、あゝ餘餘つほど好い処だといふ、いつかお前がいつた通り、上等の運が馬車に乗つて迎ひに來たといふのであらう、元日からはお引ずりでも着て、お京さまとも言はれるのであらう、お目出たいやうな情ない様な、變てこ頂來な事さ、私はこれでも正氣なのだよとて笑ふに

妾奉公を引き止める吉三に向かつて、お京は「私もこれでも正氣なのだよ」と言つて「笑ふ」のだが、この「正氣なのだよ」というお京の台詞を一葉が削除したということは、決定稿でのお京は、「完璧な捨子」の法を探る過酷さに耐えかね「正氣ではな」くなつてしまつたのか、それとも単に「告白」を全て吉三の権利とするために、お京の心内を一貫して語らせなかつたのか――。いずれにせよ「上」のお京とは根本的な部分で變質してしまつたことだけは確かである。お京は「捨子」の道を歩み続けることを自分から降りたのであり、結果としてそれは、吉三を「完全な捨子」とすることに貢献した。そして、その手段として選んだ「妾奉公」によつて、お京は「吉三の姉（「あやし」の役割）」をも降りねばならなかつた。その役割からお京を「降ろす」ために、一葉はにわかに「帯屋の大將のあちらこちら、桂川の幕が出る時はお半の背中に長右衛門と唱はせて彼の

帯の上へちよこなんと乗つて出る（中）」という「桂川連理柵」<sup>（三二）</sup>をひいた傘屋の朋輩の「翻弄」<sup>（からかひ）</sup>によつて、「恋愛」の文脈をお京に与えなければならなくなる。そしてそれが、お京の「変貌」に深く関係しているのではないか。

## 6 メフィストフェレスの要件

吉三が「完璧な捨子」となるために、甘やかな「恩寵の時間」を裁断するべく「告白」を導き出した「メフィストフェレス」であつたことはすでに確認した。ここから先に議論を進めるにあたつて、大杉重男の知見を助けとしたい。大杉は蓮實の「恩寵の時間と歴史の時間 樋口一葉の『にぎりえ』を引き、一葉の『わかれ道』と同年に「文芸倶楽部」に發表された徳田秋聲の『藪かうじ』を論じている<sup>（三三）</sup>。大杉はこの作品を、「ある意味で『にぎりえ』と共通する地平にある」と位置づけた。

『藪かうじ』は東京近郊の「穢多村」に生まれた医師赤木黙齋と娘のお礼が町中に進出し、「愛人医院」を新しく開くことから始まる。町の人々は黙齋の「赤痣」を「遁難き穢多の章」と意味づけたり、あるいはお礼の美貌について、「穢多ていものは縹致か美しいものだつてね」と陰口を叩くのだが、こうした共同体的暴力は「愛人医院」を破壊するほど強くはない。では一体何が「愛人医院」を破壊したのか。大杉が『にぎりえ』と共通するものを見たのは、まさにこの部分である。

(…) 實際「愛人医院」を破壊するのは意識的な悪意ではなく、むしろ偶然的な善意である。すなわち「愛人医院」の世界は、横井鎮雄という十六歳の書生が薬局に新しく入ることによって破壊し始める。「無邪氣」で「少しく鈍魯なる性質」である横井は、その善良さによってお札の心を得るが、それ故に先輩の書生榎本の嫉妬を招き、喧嘩で榎本を刺して「愛人医院」を出奔する。しかしお札は、横井が去ったのは「誰かに我家の血統聞き知」つたためではないかと「邪推」を抱いて「鬱病の病」に罹る。(略)

不意に「愛人医院」を訪れ不意に去る横井は、それ以前に「愛人医院」に辛うじて維持されて来た人物間の均衡を徹底的に破壊する。彼はお札に一旦恋愛の夢を持たせ、そこから突落とすことで彼女に非差別意識を決定的に植え付け、またお榎の差別意識を間接的に目覚めさせる。(一五五—一五六項)

『藪かうじ』にあつて結城朝之助の役割を担うのは、「不意に「愛人医院」を訪れ不意に去る」、十六歳の書生、横井静雄である。ここで注目したいのは、すでに「愛人医院」に存在していたもう一人の書生、榎本では、この役割は果たせなかったということだ。彼では「愛人医院」に辛うじて維持されて来た人物間の均衡を徹底的に破壊する力を持ちえず、あくまでも横井の登場を待つて、その均衡が破られる。榎本にはそれが不可能であるのに、なぜ横井には可能な

か。それは「彼はお札に一旦恋愛の夢を持たせ」たからにほかならない。つまり、お札が恋に落ちる相手として定められた横井だけが、結城朝之助の役割、つまり「メフィストフェレス」となる資格を有するということになる。

さらに大杉は、明治二八年から翌年にかけて雑誌「文學界」に発表された『たけくらべ』<sup>(三四)</sup>の美登利の突然の変容にも同様の事態が出来していると指摘する<sup>(三五)</sup>。

美登利はかの日を始めにして生まれかはりし様の身の振舞、用ある折は廊の姉のもとにこそ通へ、かけても町に遊ぶ事をせず、友達さびしがりて誘ひにと行けば今に今にと空約束はてし無く、さしもに中よし成けれど正太とさへに親しまず、いつも耻かし氣に顔のみ赤めて筆やの店に手踊の活發さは再び見るに難く成ける、人は怪しがりて病ひの故かと危ぶむも有れども母親一人ほゞ笑みては、今にお侠の本性は現れまする、これは中休みと子細ありげに言はれて、知らぬ者には何の事とも思はず、女らしい温順しう成つたと褒めるもあれば折角の面白い子を種なしにしたと誹るもあり、表町は俄に火の消えしやう淋しく成りて正太が美音を聞く事もまれに、唯夜なくの弓張提燈、あれは目がけの集めるとしるく土手を行く影ぞる寒げに、折ふし供する三五郎の聲のみ何時「に變らず滑稽ては聞えぬ。」

〔龍華寺の信如が我が宗の修業の庭に立出る〕風説をも美登

利は絶えて聞かざりき、有し意地をば其まゝに封じ込めて、此処しばらくの怪しの現象に我れを我れとも思はれず、唯何事も耻かしうのみ有けるに、或る霜の朝水仙の作り花を格子門の外よりさし入れ置きし者の有けり、誰れの仕業と知るよし無けれど、美登利は何ゆゑとなく懐かしき思ひにて違ひ棚の一輪ざしに入れて淋しく清き姿をめでけるが、聞くともなしに傳へ聞く其明けの日は信如が何がしの學林に袖の色かへぬべき當日なりしとぞ。(十六)

「かの日を始めにして生まれかはりし様」に美登利を変貌させ、彼女に「歴史の時間」を自覚させたのは、正吉や三五郎といった表町に根を下ろす者たちではなく、いずれはそこから「立出る」運命にある信如である。信如こそが美登利にとつての「メフィストフェレス」であつたのだ。つまり「恩寵の時間」とは「人物間の均衡」が「辛うじて維持されて」いる時間であり、それはまた、そうした人物間の均衡の中で、「辛うじて」、「我れ」を維持することでもあるのである。その「恩寵の時間」は「メフィストフェレス」への恋によつて徹底的に破壊され、「我れ」は「我れを我れとも思はれ」ない「現象」をみせる結果を招く。

ここで、『にぎりえ』のお力を、『たけくらべ』の美登利を、『藪かうじ』のお礼をかくのごとく変貌させる「恋」という言葉が日本文学において持つ意味を確認しておきたい。そもそも、一葉や秋聲の作品が出来するはるか以前、万葉の時代から、「恋」とは、そこに陥

つた主体からその意思を奪うものとして理解されていた。『万葉語誌』(三六)の「恋ふ」項は、「妹に恋ひ我が越え行けば背の山の妹に恋ひずてあるが羨しき」(万葉集一二〇八番歌)をひき、「妹に恋ひ」というように対象を二格で受けるのは、主体を対象の側に置いた言い方であり、コヒがこちら側の能動的な意志によるのではなく、受動的な作用であることを示している。コヒにおける魂の遊離は、主体の意志では統御しがたいものであり、己の魂が対象によって奪い去られ支配される状態と理解された。」と説明している。

不意に訪れ、不意に去っていく「メフィストフェレス」に「恋ふ」ことは、「己の魂が対象によつて奪い去られ支配される」「現象」を出来させ、それはもはや「主体の意志では統御しがたい」事態を招く。つまり、『にぎりえ』のお力は結城朝之助に、『たけくらべ』の美登利は信如に、『藪かうじ』のお礼は横井に恋をすること、彼女たちは苛烈な「歴史の時間」に引きずり戻されていくのだ。

ここで疑問が生じる。『わかれ道』において「メフィストフェレス」の役割を演じたのは、「今年の春より此裏へと越して来」、そして妾奉公のために「明日あの裏の移轉をするよ」と去っていくお京である。「恩寵の時間」と、それを享受していた「我れ」が徹底的に破壊されるためには、「我れを我れとも思」はれぬような、「主体の意志では統御しがたい」ほどの「恋」に落ちねばならない。そうであるとするならば、『わかれ道』で吉三が抱くお京へのそれは、いかにも弱い。お京と吉三の関係性は「上」に顕著な様に、「恋」をする男女というよりも、笠間の言葉を借りるならば、「甘え」と「あやし」



の中にある姉弟といった方がはるかに適切であり、ゆえに笠間はその論において、恋愛文脈を排除している（三七）。

そもそも『わかれ道』の吉三とお京の関係性には「恋愛」が最初から入る隙がなく、だからこそ「中」において唐突に吉三とお京の間に恋愛文脈を持ち込まねばならなかった。それも、年少者（吉三）が年長者（お京）の家を訪ね、積極的に関係を結ぼうと持ちかける形によって、である。そのため一葉は「職人ども」の口から、「桂川連理柵」における「お半の背中に長右衛門」と「あちらこちら」に反転させて「翻弄」う必要があつたのだ。おそらく、一葉はこの「桂川連理柵」を用いる際、道行前後の流れを意識し筆をとつたのではないだろうか。お半と長右衛門の桂川への道行そのものは、お半を長右衛門が背負う形でなされるが、その道行にのぞむまでの両者のやりとりは、『わかれ道』のそれと重なる。次にあげる場面は、長右衛門が店の金のやりくりや妻との関係、自らの過去の過ちなどの煩悶を深める中、門口から思い詰めたように「長右衛門様く」とお半が訪ねて来るところである。

（…）わたしや是を限りにさつぱり内へ歸りますが。おまへは随分お達者で。見納めに今一度顔を。よふ見せて下さんせと。抱き起して顔つくぐ。見る目も明れぬ雨やさめ。長右衛門も此世の別れと。口へは出さねど心の内。暇乞ぞと抱きしめ。何にもきなく思はずと、煩はぬやうに母御に孝行。アイ。今迄はよふ可愛がつて下さんした。禮はいはずに氣をもまして。ア、

やくたいもない子じや。死別れではなし。縁は切ても朝夕見る顔。ア、いやく。誰も見ぬ中。サアいにやくく。コレ逝にやいのときやられ。名残も鴛鴦の離れ得ぬ。衾をわけて出て行果は。桂の川水に浮名を流すぞはかなけれ。虫が知すか長右衛門。ア、どふやらおかしい今のいにやう。合点が行ぬと門の口。落た一通灯かけに透し。書置の事。扱こそなと。かけ出しても宵闇に。『近頃河原達引・桂川連理柵』（三八九三—九四項）

お半は恋を偽んで死を決意し、最後に一目長右衛門に逢いに来る。そうとは知らぬ長右衛門は、幼い娘を諭す様に別れを切り出し、お半は悲しみながらもそれを承諾、長右衛門の家を出る。そのお半の様子に胸騒ぎを覚えた長右衛門は、お半が門口に落とした書置きを見つけ、お半の覚悟を知ると、急ぎ後を追いかけていく、というものだ。これを踏まえた上で、『わかれ道』の「下」の最後の場面を見てみよう。

（…）最うお京さんお前には逢はないよ、何うしてもお前には逢はないよ、長々お世話さま此處からお禮を申ます、人をつけ、最う誰れの事も當てにする物か、左様なら、と言つて立あがり沓ぬぎの草履下駄足に引かくるを、あれ吉ちやん夫れはお前勘違ひだ、何も私が此處を離れるとてお前を見捨てる事はない、私は本當に兄弟とばかり思ふのだもの其様な愛想づか

しは酷からう、と後から羽がひじめに抱き止めて、気の早い子だねとお京の諭せば、そんならお妾に行くを廢めにしなさるかと振かへられて、誰れも願ふて行く處では無いけれど、私は何うしても斯うと決心して居るのだから夫れは折角だけれど聞かれないよと言ふに、吉は涕の目に見つめて、お京さん後生だから此肩の手を放してお呉んなさい。(下)

おそらくは長右衛門と同様に、金銭をめぐるさまざまな柵に絡め取られ妾奉公の決意を告げるお京と、その決断を思い詰め、お京の家を飛び出そうとする吉三、その吉三を後ろから捕まえるお京——これらのやり取りがかわされているのは、夜、お京の家である。こうした場面設定の類似だけでなく、「今迄はよふ可愛がつて下さんした。禮はいはずに氣をまして」(「桂川連理柵」)、「長々お世話さま此處からお禮を申ます」(『わかれ道』)、「アゝやくたいもない子じや。死別れではなし。」(「桂川連理柵」)、「あれ吉ちやん夫れはお前勘違ひだ」(『わかれ道』)といった台詞にまでも相似が見られる。もっとも、「桂川連理柵」ではこのまま心中へと進み、『わかれ道』ではとりすぎるお京を吉三が拒絶するという明確な相違があるのだが『わかれ道』結末部においては、「桂川連理柵」における「下の巻、帯屋の段」がかなり色濃く踏襲されたのではないか。「桂川連理柵」の長右衛門は、幼いお半の一寸な想いが綴られた書置を読むいやなや、帯屋に絡む金の問題や妻への義理立てを振り切り「宵闇」へと「かけ出し」てゆく。お京もまた、吉三の切実な訴えを前にし、「羽

がひじめに抱き止め」る。お京は長右衛門とは違い、あくまで妾奉公という「決心」を揺るがせにしない。しかしそのお京のその決心に逆行するように、お京の腕は吉三を「抱き止めてしまふ。長右衛門がお半を追いかけていくには、浮世の一切を捨てねばならなかったように、お京が吉三を引き留めるには、「妾奉公」を「廢め」にしなければならぬ。だが、お京はそれをしなかった。それなのに、お京は吉三の肩から手を離せない。この時、お京はまさに、彼女(主体)の意志(決心)で、手を「統御」し難い状態にあったのではないのか。その手こそが、心内を語らぬお京の代わりに、全てを語ってしまっている。

すなわち、『わかれ道』は、「メフィストフェレス」に恋をする物語なのではなく、「メフィストフェレス」が恋に落ちる物語である。先に参照したように、「恩寵の時間」を破壊する告白を引き出す「メフィストフェレス」が出来するには、告白者が「メフィストフェレス」への恋に落ちるという前提が必要だ。ゆえに一葉は「桂川連理柵」において「恋」を外付けしたのだが、その「外付け」は、「メフィストフェレス」が恋をするという「あちらこちら」な「現象」をもたらしただけだ。

『わかれ道』が、通常のジェンダーが反転した物語構造をとっていることは、笹川洋子の『『わかれ道』における身体性と言語行為の構図——反転するジェンダー——』(三九)に詳しい。笹川は、年増のお京に一六歳という吉三の年齢や、「一寸法師」と渾名されるその身体性、さらに「上」において吉三の語りを受け止め、「下」において吉三を



「羽がひじめ」にするお京という構図を指摘した上で、

(…)『わかれ道』で、一葉はお京を男性的に、吉三を女性的に描いている。これまでの、作品でもジェンダーの反転の試みは隠喩的に行われてきた。一葉の女主人公は、男性の登場人物とくらべより冷静な洞察力、積極性を持って描かれるが、女性と男性の身体的造形はそのままである。しかし、『わかれ道』では、一葉は言語行為のレベルにジェンダーの反転を込めるといふ、それまでの隠喩的技法にあきたらず、言語行為のレベルに加え、身体性のレベル、行為のレベルでジェンダーの反転を試みる。それが、この小さく感情的な吉三と、彼を羽交い絞めする、身体的にも精神的にも力強いお京という人物像に結晶する。(七八項)

とまとめている。笹川は、一葉が言語行為のレベルに加え、身体性のレベルにおいてもジェンダーを反転させたことによって、「小さく感情的な吉三と、彼を羽交い絞めする、身体的にも精神的にも力強いお京という人物像に結晶する」結果をもたらしたのだと述べているが、はたしてお京は、このジェンダーの反転によって、「身体的にも精神的にも力強い」存在になったと本当にいえるのだろうか。筆者には、ジェンダーを反転させたところで、男性に対し女性がその劣勢を回復できるとは思われない。むしろ、『わかれ道』とは、ジェンダー反転を試みても、旧来の男女の位相の反転は叶わないという

ことを鮮やかに描いた作品なのではないか。それについて、お京が背負わされた「メフィストフェレス」という役割から考えてみたい。

そもそも、『ファウスト』<sup>(四〇)</sup>におけるメフィストフェレスは、質問の無力に絶望した大学者ファウストが、悪魔メフィストフェレスの誘惑を受けて官能的享樂の限りを尽くそうとする物語であり、それは心清き少女、グレートヘンの痛ましい悲劇に終わる。ファウストを悲劇に落とし、その魂を手に入れるべく悪意を持って唆すメフィストフェレスは「悪魔」(男)である。『にぎりえ』における結城朝之助や『たけくらべ』の信如、『薮かうじ』の横井静雄も「男」であつた。そして、誘惑した男たちとは対照的に誘惑された女たちは、「我れを我れとも思」はれぬような「現象」を生じ、破壊ないし悲劇的な結末を辿る。さらにメフィストフェレスに誘惑される男、ファウストは、二部においてグレートヘンの悲劇から立ち直り、自己救済に至るように、『ファウスト』では結局、悪意を持って人を悲劇へと陥れんとするのも、その計画された「悲劇」のちに自己救済という「救い」が与えられるのも「男」であり、結局グレートヘンがファウストやメフィストフェレスによって「損なわれる」役割でしかなかったように、そこで女性が引き受ける役割は、男性のそれと比べた時、著しく不均衡なものになっている。この構図は、『ファウスト』においても、『わかれ道』においても結局は変わらない。お京の「妾奉公」という決断によって、吉三は、孤児である己を超克し、「完璧な捨子」となるべく——一人野辺の捨て子となるべく、立ち上がることが可能になる。これを『ファウスト』第二部におけ

る、ファウストの「自己救済」と捉えるならば、ファウストがグレートヘンの悲劇を経てそこに至ったように、吉三もお京の妾奉公の決断という悲劇を経てそこに至ったということになる。グレートヘンに悪意がなかったように、お京にも悪意はない。したがってお京は「悪意なきメフィストフェレス」ということになる。また、「メフィストフェレス」にはファウストを誘惑し墮落させることによって、その魂を得ることができるといふ報酬が約束されていたことに引き換え、「悪意なきメフィストフェレス」であるお京には、そうした報酬も設定されない。つまり、「男女反転のメフィストフェレス」であるお京は、報酬なき「無償の誘惑者」の役割を背負わされるだけでなく、それと同時に、「男の救済のために損なわれる女」という役割をも引き受けねばならなかった。

笹川は、先にあげた論を「遠い明治という時代に生き、若くして逝った一葉が現代の私たちを凌駕するような近代的なジェンダー意識を備えていたのは何故なのだろうか。一葉の作品におけるジェンダーの近代性は十分読み解かれていない。」と結んでおり、『わかれ道』のお京に男性のように強い新しい女性の姿を見、それを評価しているが、むしろ一葉が『わかれ道』のお京に見ていたのは、「ジェンダーを反転させたところで、結局は男性に対して無償の奉仕を引き受けさせられ、損なわれるのもまた女である」、ということだったのではないか。その上でなお、一葉がそうした女たちを鮮やかに描くことに成功している点にこそ「一葉が現代の私たちを凌駕するような近代的なジェンダー意識を備えてい」たことに対する読み取り

をすべきであって、それがなされていないことが「十分読み解かれていない」理由であるのだと筆者は考える。

最後に、先にあげた菅聡子<sup>(四)</sup>の『わかれ道』における指摘を再掲したい。

(…)ここでもう一度〈わかれ道〉の意味に立ち戻ろう。それはお京にとつての人生の岐路であり、お京と吉三の別れ道でもあった。だが、吉三の前に、自分で選ぶことのできる選択肢は存在しない。そのような彼だからこそ、お京の選択を逆照射する存在となりうるのである。「お京さん後生だから此方の手を放してお呉んなさい」という言葉にむち打たれたとき初めて、お京は自分の「出世」が本当に意味するものと、そしてそれ自ら選んだのだということ向き合わねばならない。そして吉三もまた、「皓々と照し給ふ」「天上のお月さま」のもと、お京の部屋から一人「霜ふる野辺」に出て行かねばならないのである。(二六九―一七〇項)

吉三に、「一人「霜ふる野辺」に出て行」かせるべく「メフィストフェレス」の役割を負ったお京は、吉三に「お京さん後生だから此方の手を放してお呉んなさい」という言葉でむち打たれるまで、「自分の「出世」が本当に意味するもの」を自覚できない。つまりは、お京は吉三の肩に置いた手を離せない、それを指摘されるに至って初めて、お京は自分が自ら選んだ決断の意味と向き合うこととなる。

「メフィストフェレス」に恋した女たちが皆我を失い破滅へと向かっていったように、「男女反転のメフィストフェレス」であるお京もまた、またその道を歩まねばならないのである。

《注》

- (一) 蓮實重彦『魅せられて 作家論集』河出書房、二〇〇五年。
- (二) 相良守峯訳『ファウスト』第一部、第二部 岩波書店、一九五八年。
- (三) 蓮實重彦『小説から遠く離れて』河出書房、一九九四年。
- (四) 大杉重男「小説家の起源」『小説家の起源―徳田秋聲論』講談社、二〇〇〇年。
- (五) 『校訂一葉全集』(一八九七年)に収録。なお、本論は底本を塩田良平編『樋口一葉全集 第二巻小説 下』(筑摩書房、一九七四年)とした。
- (六) 北村一夫は『江戸東京地名辞典』において、「新網」を次のように説明している。「港区には芝新網と三田新網と麻布新網の三つがある。芝の新網町が元地で、あとはその代地である。▽ここはかつてスラム街の一つで、物乞いや個人坊主が多く住んでいた。増上寺山門を追われた破戒坊主などがこの町に集まったためとも推測される。幸田露伴の『辻

浄瑠璃』にも、その描写がある。今は貿易センタービルなどの高層ビルが建つビジネス街である。」講談社、二〇〇八年、二八二項。

- (七) 松原岩五郎『最暗黒の東京』岩波書店、一九九八年(原著一八九三年)、五九項。
- (八) 『社会政策時報』協調社、一九二二年第五号、一六九項。
- (九) 中川清編『明治東京下層生活誌』岩波書店、一九九四年、九四項。
- (一〇) 高橋裕一「角兵衛獅子の歴史と概要」『藝能』藝能学会、二〇一七年。
- (一一) 『芸能』三月号 芸能発行所、一九七〇年。
- (一二) 池内恵那「変容する角兵衛獅子―近代の都市空間―東京の中で」『広島大学日本語教育研究』第二二号、広島大学大学院教育学研究科日本語教育学講座紀要編集委員会、二〇一二年。
- (一三) 浅野正道「貧民窟」、その解釈と鑑賞の手引き―明治20年代のスラム・ルポルタージュを巡って―、『日本近代文学』(六九)、二〇〇三年。
- (一四) 港区役所『港区史下巻』、一九六〇年三月。
- (一五) 『古地図ライブラリー 別冊 古地図・現代図で歩く 明治大正東京散歩』人文社、二〇〇三年。
- (一六) 『港区史下巻』、前掲書、「第二節 近代工業の確立」項。

- (二七) 塩田良平編、前掲書。
- (二八) 森岡清美『華族社会の「家」戦略』吉川弘文館、二〇一七年。
- (二九) 黒岩涙香『弊風一斑 畜妾の実例』社会思想社、一九九二年。
- (三〇) 円地文子『女坂』新潮社、一九五七年。
- (三一) 笠間はるな 博士論文「樋口一葉の研究」第四章第三節、二〇一八年。
- (三二) 塩田良平編、前掲書、一四六項。
- (三三) マリノウスキー著 青山道夫、有地享訳『未開家族の論理と心理』法律文化社、一九六〇年。
- (三四) 一八九九（明治三二）年、徴兵制が開始される。明治六年における「徴募」の条件、「満二十歳以上 身体強健、身長五尺一寸以上」が援用され、疫疾、不具のものは徴兵を免ぜられた。『港区史下巻』、前掲書、八二七項。
- (三五) 菅聡子『エッセ文化セミナー・明治文学をよむ 樋口一葉』われは女なりけるものを』日本放送協会、一九九七年。
- (三六) 平田由美は、坪内逍遙が『藪の鶯』に与えた序文の中で、「マダムダブレーの稚き時の筆はこびもそるるに想ひ出され」とその出来栄を称賛し「倭のフースチン女史」を「目指して精進すべしと激励」することで、日本の小説を「欧土のレベル」に近づけようという文壇構想があったと指摘

- している。「女の小説を読む」『女性表現の明治史』岩波書店、一九九九年。
- (二七) 西川祐子『私語り樋口一葉』岩波書店、二〇一一年。
- (二八) 一九九四年、蓮實重彦、前掲書。
- (二九) 『文学界』第十二号、一九八三年十二月三〇日。
- (三〇) 橋口晋作は「『わかれ道』とその先行作品」『『解釈』第三五巻第二二号、解釈学会、一九八九年』において、『琴の音』を『わかれ道』に先行する作品と位置付け、「『琴の音』と『わかれ道』の共通点は世間から疎まれていて、身寄りのない少年の登場だけに止まらない。年上の、身寄りのない乙女がその少年に対して登場するという全体の構図も共通しているのである。『琴の音』の森江しづは十九歳、「つま琴の優しき音色に一身を投げ入れ」るだけの身の上のようである。『わかれ道』のお経も「二十余り」、「以前が立派な人」ながら「一人娘で同胞なし」であった。（一六項）」とし、構図の共通する『琴の音』と『わかれ道』の違いを見出すにあたって、「姉弟と思ひあうような仲の成立と崩壊（特に後者）を描いたところに注目（一八項）」しているが、そもそも『琴の音』ではお静と金吾の間に「親しい仲」自体が出来していない段階で、構図と人物設定とがごく表面的に似ているにすぎない、全く違う性質の物語であるといふ見做す方が適切である。単純に構図の共通性から後の作品へ

の影響を考察するのであれば、『われから』（『文藝倶楽部』第二巻第六編、一九八六年五月一〇日）もそこへ加える必要があるだろう。生家の打算づくの都合で家庭と子（お町）を捨てた母、美尾に先行しているのが『琴の音』の金吾の母である。これら母に捨てられた子ども、金吾とお町に目を向けると、金吾は琴の音に心をほぐされ、母への懐かしさとともに世を捨てることをとどまるが、お町は書生との不品行を噂されるような事態を自ら招いたことによって、婿養子に迎えた夫から捨てられる結果となる。これを鑑みると、「自ら」捨てられにゆく人物として、『われから』のお町は『わかれ道』の吉三に寄るかのように見えるが、お町の場合は谷中の別宅に移送される運命にあり、「二人」霜ふる野辺」に出て行くことのできる（宝を得ることのできる）吉三とは決定的に異なっている。一葉の作品において、こうしたジェンダーの問題は考察を続けていく必要があるだろう。今後の研究の課題としていきたい。

(三二) 塩田良平編、前掲書。

(三三) 「桂川連理柵」とは、菅専助による義太夫節の曲名である。林京平による解説と梗概（国立劇場上演資料集（一六八）八陣守護城・壺坂靈驗記・鬼一法眼三略巻・桂川連理柵）国立劇場調査養成部芸能調査室、一九七九年、一三七―一三八項）によると、一七七六（安永五）年十月一五日より

大阪北堀江座で初演されたとある。題材となったお半と長右衛門の実説は、享保（一七一六―三五）ごろ京都の桂川で一四、五の娘と、五〇男との死骸が流れついた事件である。二段の構成をとり、上の巻では信濃屋の娘お半が丁稚長吉と伊勢への参詣の帰りに隣の帯屋長右衛門と一緒にになり、石部の宿へ一泊する。お半は長吉に言い寄られ隣室の長右衛門のもとへ逃れ、思わず同衾し契りを結ぶ。長吉はそれを知って怒り、腹いせに長右衛門が預かっている正宗の刀の中身をすりかえる。長右衛門の妻お絹は、お半を長右衛門の弟と縁組させようとするが、お半が懐胎して居るのを知って長右衛門は驚く。お絹はその事情を知らずお半に縁組を勧めるが、お半はきき入れない。下の巻において、お絹は家門和合を祈って六角堂でお百度をふむ。長吉がお半と長右衛門の関係を告げるが、お絹は長吉を買収しことなきを得ようとする。一方、長右衛門は為替百両を渡して、お絹の弟才次郎と雪野の二人を救う。長右衛門の義母おとせと、その連れ子である義兵衛は金を盗み、お半の恋文で長右衛門を陥れようとするが、お絹や養父繁齋に救われる。長右衛門はお半の遺書を見てあとを追う。義兵衛の兄五六の働きで正宗の刀が発見され、悪人は捕えられるが、この時すでにお半・長右衛門の二人は心中してしまった、と言うのが筋である。歌舞伎では、道行では四十男の長右衛門

と一四歳のお半との変態的な恋愛を演ずるのにお半を背負って出るのが型となっているが、この関係を巧みに表現していると思われる。

(三三) 大杉重男、前掲書。

(三四) 塩田良平編『樋口一葉全集 第一巻 小説 上』筑摩書房、一九七四年。

(三五) 二〇二一年度 東京都立大学人文科学研究科日本文学教室 大学院ゼミナール「日本文学研究」にて言及。

(三六) 多田一臣編『万葉語誌』筑摩書房、二〇一四年、高桑枝実子「恋ふ」項。

(三七) 笠間はるなは前傾書の論文「『わかれ道』論——葉テキストにおける「独白」と「対話」における注釈(9)にて、「(中)にはお京と吉三を『桂川連理柵』に擬えた揶揄が描き込まれているが、お半と長右衛門の関係を「一寸法師」と言う吉三の身体的特徴によって異化する記述は、年齢の開きを大きくする未定稿からの改稿とも相俟って、二人の間に恋愛関係が築かれる可能性を排斥している。」(二六九項)としている。しかしながら、林京平の解説(注三二)によれば、『桂川連理柵』は、年の離れた男女の死亡事件を扱った「桂川事件」を題材にしており、死亡した男女の大きな年齢の隔たり自体が人々の耳目を引くことから、いわば「変態的な性愛」として当時の書き手の目に止まったと思われる

る。その文脈でいけば、「桂川連理柵」はそもそも一般的な組み合わせの恋愛を扱った戯曲ではない。筆者も「上」においては吉三・お京の間に恋愛関係を読み取るのは難しいと考えるが、「中」及び「下」においてもその立場を崩さずに読解できるかと考えた時、そこには大きな疑問が生じる。笠間が『わかれ道』において恋愛関係が築かれる要素を排斥してしまったのは、やや早計でないだろうか。

(三八) 頼桃三郎校訂 『近頃河原達引・桂川連理柵』岩波書店、一九三九年。

(三九) 笹川洋子『『わかれ道』における身体性と言語行為の構図——反転するジェンダー——』『親和國文』神戸親和女子大学国語国文学会、二〇〇六年。

(四〇) 相良守峯訳、前掲書。

(四一) 菅聡子、前掲書。